

近畿地域における 弥生時代後期の青銅器生産体制

Bronze Ware Production System in the Late Yayoi Period in the Kinki Region

清水邦彦

SHIMIZU Kunihiko

はじめに

- ① 近畿地域とその周辺における弥生時代青銅器生産の変化に関する主な研究史と本稿の視点
- ② 鑄造用具について
- ③ 鑄造用具からみた青銅熔解量
- ④ 弥生時代後期における青銅器生産の検討
- ⑤ 弥生時代後期における青銅器生産体制の特質

おわりに

【論文要旨】

近畿地域を代表する青銅器である銅鐸の研究は弥生時代のみならず、のちの古墳時代を意識して進展してきた。その一つに生産体制の研究があり、弥生時代後期に顕在化する小型青銅器生産も含めた青銅器生産体制の研究は、弥生時代後期社会を考えるうえで重要な課題である。

本研究では、検討の組上に載ることが少なかった鑄造用具を主な検討軸に採用した。研究の前提として、鑄造用具のなかでも目的とした製品の想定が困難であった送風管と高環形土製品について、それぞれ孔径、坏部容量に着目して金属材料の熔解量の大小を導き、大型品用と小型品用に大別した。この大別に加え、弥生時代中期後半の鑄造用具の系統と銅鐸群の相関を踏まえ、後期の鑄造用具を検討した結果、後期の小型青銅器生産は中期後半の銅鐸生産の複数系統の技術系譜を引きながら展開したことを明らかにした。また、他地域の青銅器生産も参考にしながら、異なる坏部容量の高環形土製品の使い分けなどから、完全に分離した二重構造の生産体制による製作と想定されていた大型青銅器である銅鐸と小型青銅器が同じ鑄造遺跡で作られる事例も存在したと考えた。さらに、大量の金属材料の熔解を可能とする後期の鑄造用具が大阪平野北部で顕著に認められる点および近畿式銅鐸の分布から、従来は琵琶湖南岸にその製作地を限るとされた近畿式銅鐸には複数の製作地が存在し、そのうちのB系列は大阪平野北部で作られていた可能性について言及した。

これらの成果には従来の青銅器生産体制像とは大きく異なる見解も含まれており、銅鐸生産と小型青銅器生産の同一遺跡内での接点は、小型青銅器生産の研究に資料的限界から直接的な検討が困難な近畿式銅鐸生産の研究を進展させる可能性を与える。また、近畿式銅鐸製作地の候補として特定の鑄造遺跡を想定しえたことは銅鐸生産研究と集落研究の接点となり、銅鐸工人集団の社会的位置付けの解明に向けた足がかりとなる。

【キーワード】 弥生時代、青銅器生産、近畿地域、送風管、高環形土製品